

報告番号	※	第	号
------	---	---	---

主 論 文 の 要 旨

論文題目 中国語話者による日本語の動詞述語の習得

氏 名 初 相 娟

論 文 内 容 の 要 旨

日本語の文は、主語・目的語・動詞の SOV 語順を取り、動詞が最後にくることから、主要部後置型言語(head-final language)と呼ばれる。動詞は、文の中心であり、文における主要部(head)である。それに対し、中国語の場合は、同じく動詞が文の主要部となるが、語順は主語・動詞・目的語の SVO 語順を取り、主要部前置型言語である。要するに、日本語と中国語は基底構造が異なっている(玉岡,2005)。このような基底構造による両言語の語順の違いは、中国人日本語学習者が日本語を学習する際の困難点の1つとなりうる。特に日本語の動詞述語はさまざまな文法事項との関わりと共に成り立っていることから、とりわけ重要である。つまり、動詞および動詞述語文の習得は日本語学習者にとってとても重要であり、日本語学習の成功の鍵とも言える。この重要な学習項目の習得にどのような要因の影響があるのか。この点を明らかにすることで、学習者の日本語の効果的な指導にもつながると思われる。そこで、本研究は中国人日本語学習者を対象に、動詞述語の習得に与える要因を実証的に研究することにした。具体的には以下の3つの研究課題を取り上げている。以下、研究課題ごとにまとめて考察する。

研究課題1：文の理解において動詞の重要性

第1章は序論であり、研究の目的と背景を述べる。第2章では動詞の重要性を検証する。検証の際に、場所を表す格助詞「で」と「に」の習得を例に行った。動詞の要因として(1)動詞の難易、(2)自他動詞を設定し、助詞の習得にユニット形成の傾向が見られるかを検証するために、(3)格助詞の前に来る名詞の種類(場所・位置)を、(4)格助詞の「で」「に」、さらに被験者変数として(5)読解力の5つの変数を設定し、格助詞の正誤を予測する分類木分析を行った。その結果、読解力で分けた上・中・下の各群の影響が最も強く、読解力(日本語の総合能力とも言える)が上がるほど、場所を表す格助詞の正答率が上がっていた。さらに、上位群では、場所と位置の影響が見られ、場所では

動詞の難易、位置では格助詞の「で」「に」が影響していた。中位・下位群では、動詞の難易、その次に動詞の自他が影響していた。ユニット形成は上位群の位置の場合のみ見られ、「在」の干渉は見られなかった。このことから、場所を表す格助詞の「で」と「に」は、動詞を中心に使い分けられていることが分かった。このことから動詞は文理解においてとても重要であることが実証された。

従来の先行研究で格助詞と動詞の関係が指摘されているものとして、「が」と「を」の選択について扱ったものがあつた。日本語の構文には「目的語+を+他動詞」であるのに対し、自動詞の場合は「対象語+が+自動詞」である。自他動詞の区別ができないと「が」と「を」の使用にも混乱を生じるといふ。それに対し、場所を表す格助詞「で」と「に」の習得においては、これまでの研究ではユニット形成(場所名詞+「で」、位置名詞+「に」)のみ主張されており(迫田,2001;蓮池,2004a,2004b),「で」と「に」の習得における動詞の位置づけは重要視されていなかった。しかし、第2章で格助詞「で」と「に」を含む文を例に検証した結果、学習者が基本的に動詞を中心に格助詞「で」と「に」を使い分けしていることを示した。しかも、学習者の日本語レベルが上がるにつれ、格助詞「で」と「に」の習得が進んでいることも指摘した。

研究課題2：動詞の活用形の習得状況

次に、動詞の活用形の習得について明らかにした。第3章と第4章では動詞の活用形のマス、タ、タイ、ナイ、テの習得について、初級日本語学習者を対象にして、学習者が項目学習を行っているか規則学習を行っているかの観点から検証した。その結果、どの活用形もよく習得されており、基本的に規則学習が進んでいることが分かった。また各活用形の習得状況を調べた結果、マス形はよく習得され、その次はタイ形、ナイ形、テ形であり、比較的習得が遅かったのはタ形であつた。テ形はインプットが多く、同じ変化規則を持っているタ形より習得が進んでいることが分かった。さらにテ形の変化形で文法能力を予測した結果、「いて・いで系」「んで系」の習得が文法習得に貢献することが示された。つまり、「いて・いで系」「んで系」を習得することが文法能力を分ける要因になっているということが明らかになった。またこの結果はテ形が文法項目の1つであることを証明し、テ形と文法と緊密な関係を持っていることを実証するものである。第3章と第4章で対象となる日本語学習者は4ヶ月しか日本語を習っておらず、初級レベルの学習者であるにもかかわらず、動詞の活用形がよく習得されていて、規則学習がかなり進んでいる。この結果から、中級、上級であっても動詞の活用形はよく習得されているであろうと推測できる。要するに中国人日本語学習者は、日本語能力と関係せず、動詞の活用形の習得においては、規則を正確に応用することにある程度成功していると言える。

研究課題3：複雑な動詞述語の習得に影響する要因

テ形は使用頻度が高く、文法と緊密な関係を持っている。では、テ形によって連結・構成される複雑な述部構造はどのように習得されるのか。そこで、第5章では複雑な述部構造のテストを作成し、その理解に影響する背景要因を検討し、述部構造の理解が読解へどのように貢献するかを明らかにした。決定木分析で行った結果、述部構造の影響要因は1年・2年の学習期間が最も強い影響要因で、次に階層構造と述部の前項動詞の難易度が影響していた。日本語学習1年では述部構造を

理解する際に、動詞の語彙理解に留まり、日本語学習 2 年では動詞の語彙のみならず、文の階層構造の習得も進んでいることが明らかになった。また、階層構造の複雑さで読解を予測した結果、2 階層と 3 階層のより複雑な述部構造の理解が読解を促進していたことが示された。この結果をより深く追及すると、1 年、2 年の学習者の全体で考える場合、語彙知識と文法知識が述部構造の習得を促進し、さらに読解を促進するという因果関係を想定できよう。そこで 第 6 章 ではこの想定された因果関係が妥当であるかどうか、SEM の手法を用いて検証を行った。その結果、モデルの指標が基準に満ち、良好なモデルであることが示された。つまり、語彙知識と文法知識は述部構造を仲介して読解へ促進するという因果モデルが成立していた。また語彙知識と文法知識を比較すると、語彙知識の影響力が強いことも確認された。つまり、述部構造の理解に文法が必要としているものの、語彙力と比較すると弱かった。また述部構造の理解は総合的な日本語能力を必要とし、同じく日本語能力を必要とする読解を促進していることが分かった。この結果は従来指摘されているように語彙知識と文法知識が読解を促進するという結果を支持するものである。ただし、本研究の結果は、単純に語彙知識と文法知識のみが読解を促進しているのではなく、述部構造を仲介し、読解を促進しているということを明らかにした。つまり、読解は総合日本語能力を必要とし、その読解の発達は述部構造などのような複雑な文の理解から影響を受けているということを意味している。

複雑な動詞述語としては、他に複合動詞があることが知られている。第 7 章 では複合動詞の語彙的複合動詞を対象に、V1+V2 の語彙的複合動詞の習得に影響する要因を検証した。検証のために、4 つの要因を設定した。具体的には、(1)V1 動詞の難易度、(2)V2 の他動性、(3)複合動詞の抽象性、(4)日本語学習期間である。分析の結果、主要な要因は V1 動詞の難易度であった。V1 動詞の違いから分岐して、「易しい」場合には、日本語学習期間が影響した。2 年間の日本語学習期間では 1 年間より語彙的複合動詞の習得が進んでいる。さらに、V2 動詞の他動詞の影響が見られ、最も習得が容易だったのは、V1 動詞が易しく、V2 動詞が他動詞で、2 年間日本語を学習した条件であった。最も習得が難しかった条件は、V1 動詞が難しく、さらに V1+V2 が意味的に抽象的な語彙的複合動詞の場合であった。語彙的複合動詞の習得に影響する要因は述部構造と異なり、学習期間と関係せず、V1 動詞の難易度はもっとも強い影響要因であった。つまり、1 年日本語を学習しても 2 年日本語を学習しても語彙的複合動詞の理解において、主に意味を理解するために着目しているのは V1 動詞であった。V1 動詞が易しい場合のみ日本語学習期間の影響が見られた。V1 動詞が難しい場合、語彙的複合動詞の全体的な意味(抽象的・具体的)が理解に影響していた。第 8 章 では SEM 手法を用いて語彙的複合動詞をめぐる因果関係を検証した。その結果、文法知識から語彙知識へと、さらに語彙知識が語彙的複合動詞の習得を促進していることが分かった。このように同じく複雑な構造を持っている述部構造と語彙的複合動詞の理解において、両者は異なる理解方略を示していることが分かった。以上の点も、本研究によって、新たに明らかにされた点である。

第 9 章 では総論であり、以上 3 つの研究課題の結果を日本語学習者の日本語能力、動詞の語彙的・文法的側面からの影響という点からまとめると次の通りである。格助詞「で」と「に」の習得は学

習者の日本語能力によって異なり、「で」と「に」の習得は学習の発達段階にあることを示している。

それに対し、活用形の習得は主に活用規則に依存し、規則学習しており、初級段階でもかなりよく習得されていることが明らかになった。また述部構造の習得は学習期間とともに発達し、学年が上がれば上がるほど習得が進んでいた。述部構造の習得も学習の発達段階にあると言えよう。それに対し、語彙的複合動詞の習得は学習期間と関係せず、主に V1 動詞の語彙的側面に依存して学習していることが明らかになった。語彙的複合動詞は「飲み歩く」のように意味的な制約が強く、文法などから類推することができないものが多い。そのためか学習者の学習期間の長さに関わらず、習得が進んでいないようである。

さらに動詞を語彙的側面と文法的側面から見ると、格助詞「で」と「に」を含む文は動詞の語彙的側面(難易)、動詞の語彙概念構造(自他)から影響を受けており、語彙的側面の影響が強かった。一方、動詞の活用形の習得においては、項目学習が弱く、規則学習のほうに優勢であり、かつテ形習得は文法と緊密な関係を持っているという結果から、学習者は主に文法の規則に依存しており、動詞の語彙からの影響が弱かった。それに対し、述部構造の決定木分析および SEM の結果では語彙と文法の両方から影響を受けているものの、比較的語彙の影響力が強かった。それと同じように語彙的複合動詞のほうも主に V1 動詞の語彙的側面からの影響が大きくなっていた。本研究で検証した結果は以下の 2 点において日本語教育に応用できる。

第 1 に、動詞述語の習得状況に応じた動詞の活用形の指導法が必要である。動詞述語の習得は学習者の発達段階にある。本研究で対象となる動詞述語の場合、動詞の活用形以外に、基本的に発達段階にある項目である。つまり、学習とともに上達できるものである。この結果から分かるように、動詞述語の習得は、学習によって上達が可能であるということが実証された。そのため、日本語教育では動詞述語の指導は段階ごとに行い、学習の初級段階では理解が遅れていてもむしろ自然なプロセスで、中級、上級になって少しずつ習得が進んでいくことが予想されるため、その習得の進み具合に従い、指導を行うべきであろう。また動詞の活用形の習得は発達段階にはないが、規則を中心に学習していることが分かった。それを踏まえた上で、1 つ 1 つの動詞の活用形を指導するより、動詞の活用形の規則を詳細に明確に説明し、その規則に従って未知の活用形を作らせるほうが効果的であることが分かる。しかも中国語には活用がないため、ローマ字での活用規則の説明は漢字を中心に勉強している中国人日本語学習者にとっては理解されにくく、中国人日本語学習者に向いている活用規則の説明方法が必要であることが分かる。

第 2 に、学習者の習得に応じた動詞の語彙的側面に着目した教育が必要である。本研究では、動詞述語の習得は主に動詞の語彙的側面に依存していることが分かった。一方、日本語教育では文法シラバスの教授法がまだ残っており、試験対策のために文法を中心に教育しているところもある。しかし、本研究で検証した結果では、動詞の活用形を除いて、動詞述語の習得に基本的に動詞の語彙的側面から強く影響を受けていることが分かった。この結果を見る限り、動詞述語の指導において、文法的側面にばかり着目して指導するのは逆に効率が悪く、語彙的側面を重視して指導するのが適切であると考えられる。